

# レンコン畑に魚呼び戻せ

田代・徳島大助教が農家と協力

## 魚道を設け水路つなぐ

全国有数のレンコンの産地、鳴門市大津町で、レンコン畑に魚を呼び戻す試みが進んでいる。徳島大助教の田代優秋さん(28)「保全生態学」が農家の協力を得て、約10カ所に水の生き物をレンコン畑に導く魚道を設置する予定だ。環境に配慮した農地づくりが全国的に水田などで広がりをみせるが、沼地のレンコン畑での試みは珍しいという。(今林弘)

魚道を設置するのは、主に同町の段岡地区。レンコン畑約40畝が広がり、土製の水路が網の目のように延びる。だが、3年前に給水のパイプ

ラインが完成したことで、水路は排水用に使われるようになり、水路にすむ生き物にとっては、レンコン畑への行き来が難しくなったという。

そこで、今年7月、レンコン農家の女性有志が畑で生息する生き物を学ぶ勉強会を開催。その時、講師を務めた田代さんは、生き物を畑に戻す



レンコン畑の畦の一部を切って設置した魚道。どんな魚が遡上したかを調査する＝鳴門市大津町段岡で

のに魚道が有効であることを説明した。これを機に、自らの研究で魚道設置を提案したところ、協

力の輪が広がった。県専門藍住農業支援センターも協力する。田代さんは、04年から約2年間、徳島市川内町などの水田で県と共同で数種類の魚道を設置し、効果を調査した。今回は

その時、効果のあった簡易型の魚道を使う。レンコン畑から水を抜く時の「落水口」にパイプ(直径約15センチ)を通し、水路から畑に魚が遡上できるようにする。大工事の必要がなく、農家の負担はほとんどない。9月に設置した農家では、メダカ数十匹の遡上を確認している。

また、畦の一部を掘削した魚道も設置。魚道の違いによって、どのような魚が遡上してくるかなども調べるといふ。レンコン畑は、収穫時期を除くと、ほとんど水を張った状態で、ハスの葉が水面を覆う。水辺の生き物にとっては、産卵や稚魚の成長に適したゆりかごのような場所です。水路から水を引いていた時代は、フナやスッポン、ドジョウなどがよく取れたという。

魚道設置に協力する斎藤倫子さん(66)は、化学肥料や農薬の使用を抑えることに取り組む「エコファーマー」の認定を受けた農家。自らも魚道の設置に取り組んだこともあり、「様々な生き物がすむことが出来る農地で収穫したレンコンは、安全な食べ物の証明にもなる」といふ。田代さんは「昔はレンコン畑で取れた魚で酒盛りをしたと聞く。地域交流が復活するきっかけになれば」と話す。